

(諸事情により、サイト更新を、早めさせていただきます。)

Web3と公共性 1

(や＝山田 学) [☆★Web3と公共性★
★大手銀行員で、ある政治団体の関係者から、次の本を、紹介されました。中島 聡^{さとし}『シリコンバレーのエンジニアはWeb3の未来に何を見るのか』(SBクリエイティブ2023年1月) <https://www.honyaclub.com/shop/g/g20725163>。話題のWeb3について、その明暗^{さとし}を、冷静に、書き分けてをられます。(実は、暗の部分も多い!) 中島 聡氏は、たとへば、結果として、あの「Windows95」「Windows98」開発の、中心にをられたなど、本質的なエンジニアです。その中島 聡氏が、いよいよ、Web3についても、みづから、プログラム・コードを書かれつつ、参入され、この分野について、本質展望をなされた。わたしどもはこれを、良書として、歓迎いたします。以下、「暗号資産」「暗号通貨」「NFT」「スマートコントラクト」「ブロックチェーン」「DAO」「トークン」などの、Web3用語について、ここでは、説明を略させていただきます。]

(『…Web3の未来に…』206～207ページより
・原文の強調部分に を付した。) [本当の意味で価値のある、社会にとって不可欠だといえる、そんなWeb3アプリケーションは

まだ登場していません。暗号資産やNFTによる資金調達ができるようになったのは画期的なことではありますが、マイナス面も多いのは、ここまでに述べた通りです。だからといって、Web3には意味がないと考えるのも早計です。

誰にでも情報にアクセスできる透明性と、管理者がいなくても動き続ける永続性、そしてスマートコントラクトの自動処理による厳密性。

これらの特徴をすべて兼ね備えた仕組みは、今のところWeb3以外には存在しません。

そう考えていくと、Web3が本質的な意味で最もその力を発揮するのは、国や自治体がかかわる公的な分野であると私は考えています。]

(同208ページより) [国の根幹にかかわる事柄こそ、Web3を活用すべき分野だといえます。もっとも、今Web3を推進しようとしている政府関係者が、自分たちのクビを絞めるかもしれない透明化を今後力強く進めていくかどうかは疑問ですが。また、無理矢理にWeb3を使ったシステムを官公庁に導入したとしても、透明化の文化が根付いていないのであれば、結局従来通りブロックチェーン外の根回しで物事が決まってしまうだけかもしれません。

しかし正直なところをいえば、すでにシステムの確立された国がWeb3に移行するこ

とは相当に困難だと思われます。

逆にいえば、小規模な新興国であれば国家システムをWeb3で作ることもできるのではないかと私はそう期待しています。]

(同213～214ページより) […ようやく見えてきたのは、非営利法人とNouns型(註…Nounsと称するDAOが開発した型)のトークンを活用したインセンティブモデルの組み合わせです。

サービスを運営する主体は、NPO、NGOなどと呼ばれる非営利法人が行ないます(日本では、「非営利型の一般社団法人」です)。そこが「社会に価値をもたらす」というビジョンの元にプロジェクトを立ち上げ、開発者集団とスマートコントラクトで契約を結ぶことによって、生み出したサービスを社会に提供するのです。

開発者集団への報酬の提供の仕方は、Nounsのように発行するNFTの一部を渡すものでもよいし、売上の一部を渡すものでも構いません。

大切なことは、開発者のインセンティブを非営利法人の目的と一致させることです。その設計さえしっかりとできており、かつ、スマートコントラクトによって自動化されていけば、開発者たちは、そのサービスの成功のために懸命の努力をし、Win-Winの関係を築くことが可能になるのです。]

(同215ページより) [私は、こんな形で数多くの非営利法人が立ち上がり、そこにかかわ

る開発者たちが、発行されるトークン (NFT+暗号通貨) の形で報酬を受け取る世界こそが、「来るべきWeb3の世界」であると思うし、それを実現してこそ、「Web3の時代になっても、新たなGAFAMに力が集中してしまう時代」を防ぐことができると考えています。]

(や) [わたしはこの、中島 聡氏による、本質的提案に接し、ICTとはまったく無関係に、わたしが若いころから、在野の国家論者・滝村隆一師 (1944~2016) に学び続けてゐることが、強く結びつくかもしれぬと、直観しました。(師の著は、『国家論大綱 第一巻 上・下』勁草書房2003年、『ニッポン政治の解体学』時事通信社1996年など。)

ブロックチェーンといふ技術を土台とする、Web3は、中島氏が指摘されるやう、透明性・永続性・厳密性といふ特徴があります。これは、〈ほんものの公共性〉にこそふさはしい、特徴ではないでせうか。

地球の現状は、とくにこの数年間、〈ほんものの公共性〉とは、正反対の方向に、動いてゐるのではないか。ダヴォス会議を主催する、世界経済フォーラムなどが、いびつな地球統制を、助長しようとしてゐる。近代科学は、実は、人間や他生物の生命について、人間による世界認識について、人間が諸民族性に分化したことについて、理解が、薄い。世界経済フォーラムなどは、その近代科学の弱点のままに、19世紀以降の、化学や、20世紀以降

の、遺伝子工学や、計測制御技術などに、とらはれ、いびつな地球統制を、助長しようとしてゐる。その裏に、特定大企業群の資産増殖欲も、見え隠れする。

このいびつな地球統制に、対抗すべく、〈個人の自立と協同。やがてはやがては、諸民族の自立と協同。〉を、志向する勢力が、増えてゐる。米国のトランプ前大統領や、ロバート・ケネディ・ジュニア氏への、熱烈な支持 (日本では、あまり報道されてゐない。) は、その一環です。日本社会にても、参政党といふ新政党が、興隆しつつあります。(同党代表の松田 ^{まなぶ} 学氏が、Web3応用の「松田プラン」を、提唱してゐる。)

米国社会も、中国社会も、根本破綻の懸念があるなか、日本国統治 (外交・通商貿易・金融政策・軍事・治安警察) の、自立と強化が、喫緊の課題です。

以上を、今の大前提として、先に言及した、在野の国家論者・滝村隆一師に、学び続けてゐることです。そもそも、国家といふ組織は、どういふ必要と必然により、成立し、今も存続してゐるのか。これについて、学界の諸都合にとらはれず、まったく自由な在野の立場から、総合解明した学者を、滝村隆一師以外に、わたしは知りません。今のところ、ICTないしWeb3にとつては、まったくの外野である、滝村国家論を、強く参照してこそ、中島 聡氏が、さしあたり試行してをられる、非営利法人Web3も、本質的に、生きてくる

のではないか。すなはち、〈ほんものの公共性〉とは、なにか、です。

わたしが昨年6月に、JOMONあかでみいサイト「店頭」画面にて、公開させていただいた、〈超然の想ひ地球協同社会へ〉

表紙 http://www.jomaca.join-us.jp/chikyu_fine.pdf

本文 <http://www.jomaca.join-us.jp/chikyu.pdf>

の本文より、次の部分はとくに、滝村隆一師に学んだことの、精髓です。]

(〈地球協同社会へ〉本文1ぺより) [議会議制民主主義の、国民国家も含め、国家は本来、諸部族の闘争、諸民族の闘争を、調整するための組織です。次に、資産階級の闘争を、調整するための組織です。つまりは、闘争の存在が、前提となつてゐる、組織です。

〈脱国家〉といふ、認識転換こそが、地球協同社会への、入門です。

闘争から、調和へ。

諸民族調和と、資産循環。民間からの、これらへの、規範が、地球協同社会への規範です。民間からの、〈もうひとつの公共〉です。

そして、この数千年の、諸国家といふ規範から、無理なく、無駄なく、^{けだつ}解脱してまいります。]

(や) [わたしがこの論文を書いた当時は、Web3入門の本さへ、読んでをらず、今この文章にて書いてゐることを、想像だに、してゐませんでした。が、もしもこの論文が、中島

聡氏らによる、Web3本質試行にも、生きてくるなら、この上ない喜びで、ございます。この論文から1年後、今年6月に、JOMONあかみサイト〈健康平和研究〉画面にて、公開させていただいた、

〈道徳復興ヤマト平民会議への想ひ〉

<http://www.jomaca.join-us.jp/omoi.pdf>

は、〈地球協同社会へ〉といふわたしの試行のうち、まづは、道徳協会運営のための、文章です。山田 学の、もっともまじめな部分でございます。暗号資産、有価証券、有価固有データなどが、自由化民衆化されてみると、考へられる、Web3。それにともなふ、人間心の暗黒の部分も、ひと通り経験した今、わたしどもからは、〈道徳復興ヤマト平民会議への想ひ〉こそを、提出させていただきます。中島 聡氏が、この著の「おわりに」の末尾に書かれた、本質的なエンジニアとしての決意に、感動いたしました。]

(『…Web3の未来に…』318ページより) [Web3バブルが崩壊し、冬の時代に入ったことは、むしろよかったと思っています。

ベンチャーキャピタルからの資金がポンジスキーム (註…後から参加した人が投資したお金を、先に投資した人に配当として渡してしまふ投資詐欺) で回しているような会社が淘汰され、その後で、Web3を使って社会に対する価値を追求しようとするビジネスが生れてくる。

そんな未来のために、私は今コードを書い

ています。]

(や) [わたしどもは、究極は、〈脱国家〉の立場ですが、ただし、人間社会全体史の水面下にて、実は、わが日本民族の (ひろい意味の) ご皇統が、また、欧州のハプスブルグ家などが、最重要のご活動をなされてきた事実について、重く重く、受け止めさせていただいてをります。これを大前提とし、日本国の新しいあり方についても、追求させていただきます。ここに言及した、水面下の事実については、落合莞爾先生による諸著作・DVDなどを、参照のこと。]